

下関市国際交流員 李 佳琦
(中国山東省青島市派遣)

「注文の多い土地（前編）」

下関市国際交流員の李佳琦（リ カキ）です。今回は中国のバラエティ番組から、とある田舎で起きた奇妙な物語についてお話しいたします。



(1) はまった収穫機

十人の少年が、すっかり新農人¹の様子で、ぴかぴかした農具を担ぎ、可愛い犬を三匹連れ、だいぶ田舎の、農作物と野草でカサカサしたところで、こんなことを言いながら、立ちつくしていました。

「あのさ、ここらへんの田んぼは怪しいぞ、収穫機が入ったらすぐはまっちゃうし、水稻の倒伏も厳しくてさ。大した農作物もできないのに、生意気な土地だなあ。」年の順番でいうと、七番目の弟は腰に手を当てて、水田にはまっ

¹ 新たな技術を把握し、農業に従事する若者のことを、中国語では「新農人（新農人、しんのーれん）」と呼ばれる。

た収穫機を眺めながら悔しげに言いました。七番目の弟は青島市出身で『星の王子さま』が大好きな役者の趙小童です。この物語では「童七」と呼びます。

「さっさと収穫を終えて、肉でもなんでもいいからいっぱい食べて、あったかい布団に入っていたら、最高ののに。」九番目の弟が一匹の犬を撫でながら言いました。なにやら、三匹のうちの一匹は九番目の弟の飼い犬のようです。九番目の弟は甘粛省の蘭州市出身で崑曲²専門の陳少熙で「少九」と呼びます。ちなみに、彼の飼い犬は「狼」といいます。



それは晩秋の頃でした。水田の持ち主は、その辺の水田と古い屋敷を紹介すると、冬を過ごすためにどこか暖かい南の方へ引越しました。

厳しい収穫業務の繰り返しで、その可愛らしい犬も元気を失い、しばらくうなると、自分の飼い主の懷に倒れ、気を失ってしまいました。

「来週からは雪いっぱいだよ。今晚水稻の収穫を終わらせないと、小麦の播種は間に合わないかも。これは大ピンチだ。」一番目の兄はしかめっ面な顔で残酷な事実を告げました。一番目の兄は新疆出身のチャンピオン歌手、蒋敦豪で「敦一」と呼びます。敦一はバンドのギタリストもやっていますが、余りにも売れないので畑に来ました。有名なりアリティ農業番組に出ることで、有名になれるかもしれない、自分のバンド、自分の音楽に目を向けてくれるかもしれないという思いでここに来ました。しかし、まったく慣れない農業に取り組んで、限られた時間でこんなひどい水田で水稻の収穫をさせられて三日目、敦一も限界に来ているようです。



「ピンチだね、俺もそう思う。しかも収穫を終わらせたとしても、この水田にそのまま小麦が育つわけがない。土壌が湿りすぎてる。まずは土地を整えなきゃ。溝を掘らないと。」三番目の兄は泥まみれのオーバーオール姿で、シャ

² 「崑曲 (崑曲、くんちゅう)」中国の伝統的な戯曲である。現在の江蘇省蘇州市で発祥し、「歌」を中心に、いくつかの動作を加えて成り立つ芸術である。「百戯の祖」とも呼ばれる。

ベルを手に持ちました。三番目の兄は重慶出身の俳優の李耕耘で「耕三」と呼びます。耕三はもともと農家の子なので、耕作などについては他の人より少し詳しいですが、「少し」だけです。このわずかの情報差で、耕三は現時点でリーダー的な存在となっています。農業に関しては他の男と変わらず半分素人の耕三なのに、信頼されるだけで責任を痛感していました。



敦一は少し顔色を悪くして、耕三の顔を見ながら言いました。

「僕たち、もうここで諦めるか。」

「いいや、諦めるもんか。俺だって、仕事が回ってこない日々を繰り返す中、やっとこの仕事をもらえたわけ。兄貴も一緒だろう？まあ本気で戻りたいなら別にいいけど。誰も兄貴のこと責めないし。」

「すまない、俺余計なこと言ったようだ。みんな背水の陣で臨んでいるから諦めるわけがない。続けよう。」

「まだ2台あるし、夕暮れまで時間もあるし、では続けよう。」

ところがどうも困ったことに、このぬかるんだ水田でどうやって収穫機を動かせば水稻を刈れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風が吹くと、水稻はざわざわ、木の葉はかさかさ、収穫機はごんごんと揺れました。

「お腹が空いた。ボクさっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」六番目の弟が言いました。六番目の弟は河南省出身の卓沅という歌手兼ダンサーで、高校の時、夢を叶えるために地元を出て上海の事務所に加入して、一時期はZERO-Gという男子団体に属していました。ここでは「沅六」と呼びます。



「僕もそうだ。これ以上やる気が出ない。」二番目の兄もお腹を押さえながら言いました。二番目の兄のは驚卓という、山西省出身の歌手兼ダンサーで、同じく ZERO-G に属していました。沅六とはこの田舎に来る前から、長年のチームメートでしたが、最近ではなかなか舞台に立つ機会がなく悩んでいます。ここでは「驚二」と呼びます。



「働きたくない、ああ困った、何か食べたいなあ。とりあえず水稻刈って今日は帰ろう。」四番目の兄と十番目の弟は声を合わせて言いました。四番目の兄は香港出身の李昊で、広東語歌が好きな歌手です。そして十番目の弟は内モンゴル出身の王一珩、一番年下でそのときは18歳になったばかり、オリジナル歌手を目指していました。ここでは「昊四」と「珩十」と呼びます。昊四と珩十はそれぞれ一匹の犬を飼っており、名前はそれぞれ「年玉」と「壮（たけし）」です。



「食べたいならさっさと仕事仕上げるぞ。」五番目の兄と八番目の弟も言いました。五番目の兄は山西省出身の俳優で、元理系大卒の趙一博です。八番目の弟は浙江省出身の歌手、車好きな何浩楠です。「博五」と「楠八」と呼びます。



十人の少年は、ざわざわと鳴る水稻の茎の中で、畦に沿って残った水田にはまった収穫機に向かいました。その時ふと周りを見ると、水田にはまっていた収穫機がどこにも見えなくなっています。

そして水田の畔には、

「相信土地的力量³ 种地吧⁴」

という札が挿されていました。

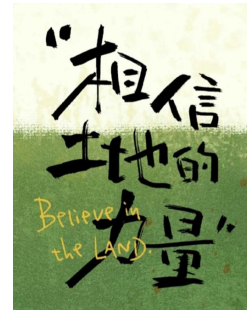
³ 相信土地的力量、シャンシントディデリリヤン、土地の力を信じよう。

⁴ 种地吧、ゾンディバ、田畑を作りましょう。

(2) ^{エデンズ}後陡門58号

「あの札、土地を信じればなんとかなるってことかなあ。」
耕三は怪しむことなく、その札に近付こうとしましたが、
昊四に止められました。

「おや、こんなところにおかしいなあ。さっきまで何もなかったし、何より水田にはまっていた収穫機が消えたぞ。」



「でも土地を信じればいいんだろう。看板にそう書いてあるじゃないか。」
鷺二は無邪気な笑顔で水田に歩みだしました。その後ろに、沅六は小さなため息をつきながらついていきました。

水田の界限に入ったとたん、二人は収穫機のように姿を消しました。

「ど、どういうこと？神隠し？」少九はショックな声を上げました。その横では、飼い犬の狼ちゃんの吠え声が聞こえ、なんやら警戒しているそうでした。

「助けには…行こうじゃないか。」少し躊躇う様子を示した昊四は一步後退りしましたが、すぐ前に歩み出しました。

「まったくデタラメだなあ。僕たちも行こうじゃないか。ここにしかヒントとなる札がないし。」敦一は落ち着いた口調で言いました。

残った八人の少年は水田の界限に立ちました。水田は見渡す限り広がっています。畔に挿された札はそよ風に吹かれて、ガタガタと揺れていました。

そして見えるか見えないかわからないくらいうっすら見える結界には、金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決して弱気になることはありません。」

少年たちは、ひどく挑発された気になりこう言いました。

「こいつはどうだ、なめられてるんじゃないか。番組に来てからさんざん苦労してきたけど、今度はオカルトの登場か。まったく理不尽だぜ。」少九は振り向いて番組のスタッフを探そうとしたが、やはり水田しか見えませんでした。

「どうもそうらしい。オカルトといっても、決して弱気になっては駄目だということね。」珩十は飼い犬の壮ちゃんを抱える腕を一本ずらして、結界に触れてみました。すると、結界は水面のように波紋を立てました。

「はいろいろか。」先頭を立つ敦一が結界に手を当てると、あっという間に結

界の向こうに姿を消しました。他の少年も敦一に続いて結界に入りました。すると、鷺二と沅六が結界の向こうで待っているのが見えました。

結界の中にも水田が広がっていますが、すぐ隣の畔には、ボロボロの建物が3軒だけになっていました。埃だらけの屋根に割れた硝子、倒れんばかりの建物に近づいて見ると、その扉に金文字でこう書いていました。

「粘り強い方や夢を諦めない方は、大歓迎いたします。」

十人は大歓迎という言葉に大喜びです。

「ほら、ぼくらは大歓迎されているんだ。」鷺二は金文字を指差して叫びました。

「おれたちは皆両方兼ねてるから。」楠八も頷きました。

「よくいうね。」博五は言葉をはさんでつつこみました。

ずんずんと2軒目の建物に向かって進んでいくと、今度はベージュ色にペンキで塗られた扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにボロボロなんだろう。」ずっと黙っていた童七は怪しげに言いましたが、耕三に話を遮られました。

「これは試練だ。新農人になるためにはみんなこうなんだ。」

そして十人はその扉をあけようとする、上に黄色い文字でこう書いてありました。

「当地は新農人のエデンの園、後陡門 58 号ですからどうかそこはご承知ください。」

「よく意味がわからないな、この言葉。」沅六はとりあえず開けてみようと、鷺二を促しました。



「それはこの辺の土地を見守るための小屋の名前ってことだろう。」鷺二はあたりまえのように進みました。

二人は言いながら、そのベージュ色の扉を開けました。するとその裏側に、
「注文はずいぶん多いでしょうが、どうか一つ一つこらえてください。」という言葉が。

「これは一体どういうことだ。」敦一は顔をしかめました。

「うん、これはきっと新農人として学ばなきゃいけないこと、やらなきゃならないことが多くてあれこれ大変な思いになるけれども耐えなさいということだ。」耕三は家族の就農経験を思い出して推測を語りました。

「そうだろう。早くどこか部屋の中に入って食べたいもんな。」珩十が言いました。

「そして体あっためたいもんな。」少九が言いました。

ところがどうも奇妙なことに、部屋の中は古めかしい壁に囲まれ、ボロボロで埃だらけの家具しかありませんでした。そしてその壁には赤い字で、

「新農人方、我々の^{エデン}後陡門58号を守るために、水稻の収穫を日が変わるまでにきちんと終わらせ、その後は溝掘りをしてください。」と書かれてありました。



(3) 注文連発

「エデン園ならりんごぐらいちょうだい。腹減ったぜ。」少九は機嫌悪そうに言いましたが、不思議なことに、飢餓も疲労も、体の異状が何も感じられなくなりました。

「わんわん。」年玉ちゃんの吠え声で外をちらっと眺めた昊四が、びっくりしたような大声で、「あれみて！」

なんと、さっきまで何もなかった水田の中には、収穫機が10台もきれいに並んでおり、ピカピカ輝いていました。収穫機の上の空には赤い字が浮かんで、

「本日中に、水稻の収穫を済ませたまえ！」

そこで、十人の少年は、収穫機を操縦して、きれいに水稻を収穫して、また後陡門58号の小屋に戻りました。

「疲れたなあ。腹減ったなあ。食い物ないか。」小屋に入ったとたん、くた

びれた少年たちは椅子や床に倒れました。

童七はまだまだ動ける様子で、あちこち食べ物を探していたところ、異状に気づきました。

水田の畦に停まった 10 台の収穫機がぼうっとかすみながら消えていき、風がどうっと部屋の中に入ってきて、扉が不気味にガタガタと音を立て始めました。

「おや?!」少年たちはびっくりして、互いによりそって、扉をがたと閉めましたが、また水田の上空に血のような薄赤い文字が浮かんできました。

「本日中に、溝掘りを済ませたまえ!」

「みてみて、何か出たぞ!」楠八は怯える様子で目を閉じました。

「言い方が怖い。」驚二と少九は楠八の腕を掴んでビクビクしながら、目を閉じることなくずっと水田の変化を見ていました。



文字は浮かんだままで、風も収まりました。静かに戻った後陡門 58 号には、夕暮れが訪れてきました。

十人の少年はシャベルと桶を手に取り、また水田の方に向かいました。

あいにく、霧雨に降られ、少し肌寒かったですが、少年たちは寒さも忘れるくらい夢中に一晩中精一杯掘り続けました。

ようやく夜明けを迎えたときに仕事を終わらせ、泥だらけの少年たちは疲れ果てた体を引きずって小屋に入ると、ベッドに入り込んでぐっすりと眠りました。



目を覚ましたら、また夕暮れになりました。溝のおかげで水田の排水はスムーズになり、綺麗な田んぼになりました。そこで空を眺めると、やはりまた新しい文字が現れてきました。

「本日中に、小麦の種を蒔きたまえ！」

「時間に厳しい！」十人の少年は飢餓も疲労も忘れたかのように、靴を履いてペタペタと田んぼに入って、種まきを始めました。

深夜、種を蒔き終わった少年たちはまた小屋に戻って、汚い工作服的なままでベッドに倒れて寝てしまいました。

翌朝、小麦畑の空に、また新しい文字が浮かんでいました。

「本日中に、有機肥料 30 トンを畑の畔に運搬してきたまえ！」

「30 トン?! それは3 千キロだろう?! 冗談だろ!」沅六は両手の指を曲げて計算し、びっくりした顔で叫びましたが、

「3 千ではなく、3 万キロだよ! 桁間違っていない? 小学校の数学先生に謝りなさい。」と、童七につっこまれました。

「一人あたり3 千キロを運ぶから、間違いでもない。」鷺二は沅六を庇うように話を遮って、また沅六と同じように指を曲げて計算し始めました。「そうだね。肥料は一袋25 キロ、えっと、つまり、一人は120 袋だね。」

「ぼくがもし過労で亡くなっちゃったら、年玉ちゃんの遊ぶ庭に埋めてください。」昊四は絶望な目つきで山のように高く積まれた肥料を見て、息苦しそうに胸をぎゅっとおさえました。

「ははあ、死なせないようにするから安心しろ。とりあえず運ぼう。」耕三は袖を巻き上げて、肥料車に向かいました。

「そうか。であれば、小麦を育てるのに撒くんだろ。その有機肥料。」

「そんな気がする。」

「そうだ。きっと。」



少年たちは言葉を交わしながら、リレーで肥料の運搬を始めました。

星がかすんで見えるか見えないうち、ようやく肥料の運搬が終わりました。
少年たちは疲れ果てて田んぼに倒れ、点在する星をひたすら眺めました。

すこし休むと、また空に赤い文字が浮かび上がりました。

「初雪の前に、肥料を田んぼに撒きたまえ！」

「初雪？いつ降るかまったくわからないのに！」驚二は空に対して、反抗的な口調で叫びましたが、空からの返事は一切来ませんでした。

「それはどういうこと。」博五は一番年上の敦一に聞いてみましたが、ため息しか返してくれませんでした。

「この土地、注文が多いね。」まとめるように童七は言いながら、また立ち上がりました。

「やるしかない。初雪はいつ降るかわからないから。」珩十も立ち上がり、兄たちを引っ張って、新たな注文に向かって身を投じました。



【つづく】